

日本語ボランティアから見た

日本語

日本語ボランティアをしていると、学習者との間で、日本語のもつさまざまな側面について気付くことが多くあります。皆さんは如何でしょうか。

文字のもつ特性・「かな文字と漢字の違いとカタカナ語」

学習者がノートに一生懸命「はし、はし、はし」と書きながら話しかけてきました。はじめは何を伝えたいのかわかりませんが、しばらくして内容がわかりました。

「はし」は漢字ごとに、各々に意味が異なっているということでした。

かな文字は個別的な意味は不明ですが、漢字では「橋」「箸」「端」というようにそれぞれ意味を表現する文字となります。

広告媒体や漫画等の表現では、かな文字より、「カーン」「キヤー」「ドスン」等、カタカナ文字を用いることにより、表現を際立てたり、強調したりしてその効果を最大に発揮する場合があります。

カタカナ語についてのある疑問

日本語ボランティアをしていると、私自身知らない言葉を減らそうという気になる。だが新語については最近だんだんフォローするのが大変になってきた。特

に英語を中心としたカタカナ語について言える。

コラボレーションという言葉も、laborを共にするのだから共同作業という意味だと聞くと、なるほどと思うが、インターネットの百科事典のウィキペディアで調べると、共演はコラボレーションだが、主演者を助ける場合はフィーチャリングと出ている。フィーチャリングを英和辞書で引くと主演と出ている。日本語になって意味が変わったのだろうか。

日本語について

日本語学校の先生から「インターネットやメールの普及で日本語を読むことや書くことの需要・重要性が増している」と聞きました。どの言語でも書くことには読むことや話すことと違った難しさがあると思いますが、日本語には表記法の難しさがあると思います。

2000字以上の漢字を覚え、ひらがなやカタカナときにはローマ字も交えた文をつづるのはとても難しい。促音や長音が正しく入力できなければ漢字交じりのメールもつづれません。

日本人と結婚した学習者から「夫や子どもと携帯メールをやり取りしたい」と言われます。まちがった表記のひらが

なだけの文でも意味は通じますが、「子どもっぽくないメールにしましょう」を合言葉に正しいひらがな表記から漢字学習へ作文へとつなげられたらと考えています。

生活のための「道具」

昨今のいじめ問題で言葉は凶器になっているけど、文学や詩の世界では言葉は芸術、お母さんの言葉は愛情の表われ。「武器としての日本語」なんていう本もありました。

ボランティア日本語教室に必要な日本語は生活のための「道具」。曖昧さ、ニュアンス、比喩、一切の飾りを取り払って相手に誤解を与える隙のない言葉でなければなりません。

でも、うるおいのない言葉を使っている自分に気づいて、ぎくりっ！

ことばを国際親善に

1930年代後半から45年の引揚げで日本に帰って来るまで、日本語は上海に暮らしながら住んでいる国に押しつける言語だったと思います。その後、日本語は次々と入ってくる外国の人達が、覚えたい言葉となりました。日本語という言葉が国際親善に役立って来ました。私はあの頃の日本のやり方のお詫びが出来かなと思っています。

日本語を媒介としてギスギスした国際情勢もボランティアとしてなごやかな人間関係にと切に念じて頑張っています。

(TNVN スタッフ)

ボランティア日本語教室 参加者の目的と課題について

文化庁文化部国語課日本語教育調査官 **中野 敦**



みなさんは文化庁の中に、外国人に対する日本語教育に関する施策を行っている部署があることを御存知でしょうか。文化庁文化部国語課では、国語の改善及び普及に関する施策の他、外国人に対する日本語教育に関する様々な施策を行っています。その中で、地域の日本語教室等で行われる活動を対象にした事業があり、これまでその当時の実情に合った形で実施してきました。

まず、地域社会における外国人の増加に対応するため、地域の実情に応じた日本語教育の推進を目的に、平成6年度から平成12年度までモデル地域を指定して、日本語教室の開催や日本語指導者養成のための研修会開催等の実施を含めた事業を実施しました。続いて、平成13年度から平成17年度まで社団法人国際日本語普及協会に委嘱して地域日本語支援コーディネータ研修・日本語ボランティア研修を全国で開催し、地域における日本語教育の推進に努めました。平成14年度からは、地域に居住する外国人の親と子が日常生活に必要な日本語を学ぶための「親子参加型日本語教室」を開設して、地域における日本語教育の一層の充実を図ると共に、外国人との相互理解や日本語支援関係者の連携促進を目指した事業を展開しました。そして、平成18年度からは、人材育成、日本語教室設置運営、教材作成、連携推進活動の4分野について、意欲的で優れた活動の企画を公募、選抜し、その実施を委嘱しています。

これらの事業報告書を読むと、地域における外国人の日本語に対するニーズは非常に多様であることがわかります。そしてそのニーズに応えようとそれぞれの日本語教室がさまざまに工夫している様子もわかります。このような報告の一部は文化庁のホームページに掲載されているのでご覧ください。

(www.bunka.go.jp

国語施策・日本語教育に関して)

ところで、地域の日本語教室活動から改めて気づかされることがあります。それは、日本語の習得それ自体がほとんどの学習者にとっての最終的な目的ではないということです。日本語指導者は、学習者の日本語習得のことを考えれば考えるほど、あたかも日本語習得それ自体が学習者にとっての目的であるかのように思い込みがちです。しかし、学習者にとっての真の目的は、日本語を習得することによって可能になる何かであって、日本語習得そのものではないのが普通でしょう。学習者のニーズに応えるためには、日本語学習の先にある目的についても配慮した指導を心がけることが大切ではないでしょうか。実際、学習者が集まらないという課題を抱える日本語教室の多くに、上述のような特徴が共通してみられます。また、活動が学習者に対する日本語指導に偏り、かつ、その内容が生活から切り離された言語知識の導入を目的に行われていると、今度は支援者にとって参加しにくい環境ができあがってしまいます。日本語ボランティアが足りないという課題を抱えている日本語教室によくみられる特徴です。

以上、地域の日本語教室の活動等から学び、気づいたことを御紹介しました。このような気づきや情報はできるかぎり多くの方と共有したいと考えており、文化庁のホームページに活動報告書を公表したり、文化庁日本語教育大会の研究協議会の中などで紹介してもらったりしています。TNVNの活動も是非、NL等を通して、御紹介いただき、地域の日本語支援活動の充実に御協力いただければと思います。

東京都国際交流委員会 「リビング・インフォメーション」 のご紹介

東京都国際交流委員会 佐々木依子

1300万人近い人々が暮す大都市東京。この東京で日々暮していると、街の中、電車の中、あらゆる所で沢山の外国人の方を見かけます。皆さんも外国人の方が増えていることを日常的にお感じになっていると思います。

今日本の抱えている少子高齢化、労働力不足などの問題やボーダレス化する世界を考えると、今後在住外国人の数は増加する一途だと思われる。実際国は2030年には日本の総人口の20%が外国人になるであろうと予想しています。

現代社会はITの飛躍的な発展により、世界中のどこにいても様々な情報が瞬時に簡単に手に入ります。また通信手段も格段に進歩しています。昔に比べれば、外国人にとって暮しやすくなっていると思います。そう言うものの、やはり言葉や文化、習慣の違う国で暮すことはとても大変なことです。分からないことや、迷うことも沢山あることでしょう。そんな外国人の方々のために各方面で様々な情報が提供されています。

各区市でも多言語の生活情報のパンフレットを作ったり、インターネットでも沢山の情報サイトがあります。そしてこの度私共東京都国際交流委員会も外国人のための生活ガイ

ドを立ち上げます。

ここでいくつかこの生活ガイドの特徴をご紹介します。

このガイドは大きく3つのコーナーで成り立っています。「転ばぬ先の知恵」「緊急災害時の対応」そして「生活ガイド」です。

「転ばぬ先の知恵」では、ガイドブックには載っていないようなちょっとしたこと、でも知っておくと便利というようなトリビア的な情報を提供しています。ご近所の世話好きなおばさまが外国人にアドバイスするようなイメージで作りました。

「転ばぬ先の杖」ならぬ「知恵」な訳です。

「緊急災害時の対応」では大都市東京で起こりうる様々な災害を想定して、予防や実際の対処方などをご紹介します。

そして「生活ガイド」では外国人の視点から出来るだけ多方面の情報を詳しくご紹介しています。

さらにイラストや図を効果的に使い、分かりやすく楽しく見ていただけるように工夫しました。

今までの情報サイトとは一味違ったサイトになっている

と思います。

日本人の皆さんに見ていただいても、きっと参考になる情報がありますので是非ご覧になってください。またお知り合いの外国人の皆さんに教えてあげてください。

今年度は日本語と英語の2ヶ国語で立ち上げますが、来年度はさらに中国語と韓国語に翻訳する予定です。また、このサイトをよりよくしていくためにも皆さんからのご意見やご感想などお寄せいただければ幸いです。

UP時期：3月下旬
アドレス：東京都国際交流委員会の
トップページ
<http://www.tokyo-icc.jp/>



子どもへの日本語支援と教材の可能性



日本語ぐるりっと(大田区)

飯島 時子

外国人登録者数が国内で最も多い東京には、日本語を母語としない子ども達も大勢います。多くは、公立の小学・中学・高校で学ぶために日本語の支援を必要としています。受け入れ対策は十分とはいえません。

成人と違い、学齢期の子どもへの支援は、文科省主導の「学校教育」と関わることであり、行政や学校中心の教育現場の閉鎖性も、ボランティアの自主的な参加を含め支援を難しくする要因かと思えます。

しかし、国や自治体がカバーできない部分をボランティアが補佐していくことは、より良い支援体制の構築の面でも大いに意義があると思えます。

これまでの経験を踏まえ、教材を中心に支援の一例を紹介させていただきます。

教材選びの基準は、子どもの背景や支援者の立場・考えによっても違ってくると思いますが、より早い時期に生活の安定を確保し本来の学業への自主参加を可能にする教材が適切ではないかと考えます。初期指導から学校生活への適応、教科学習へという一連の流れを確保することで、実際、多くの子どもはひとり立ちできています。初期・適応の段階で使用している教材のいくつかをご紹介します。

「学校生活にほんごワークブック」(日本語ぐるりっとなり著/凡人社)は、系統的にものごとを考えられるようになる高学年児童から中学生を対象としています。豊富なイラストと例文で、「にほんごをまなぼう」(文部科学省/ぎょうせい)に準拠した学校生活や学習場面の

意味を伝え、語彙や表現を練習。学校での実体験が理解を深めます。又、日本語を構造的・体系的に理解できるように工夫されていますので、終了後は、教科学習への移行がスムーズです。「語学留学生のための日本語」(岡本輝彦他著/凡人社)は高校レベルの生徒に使用します。と同様、豊富なイラストと基本文型の提示が学習項目を分かり易くしています。漢字学習も比較的早い時期に進めます。「かんじだいすき(一)~(六)」(国際日本語普及協会編)が使いやすい教材です。「BASIC KANJI BOOK Vol.1,2」(加納千恵子他著/凡人社)は、年齢の高い英語対応が可能な生徒に良いかと思えます。漢字圏の生徒には、「読み方」を中心に意味の確認に使います。公文や他のドリル教材、国語の教科書も適宜使用します。可能な範囲で母語も用いながら教科学習へと進めます。

教科学習は、教科内容を知識として理解し、更に運用力も求められることから、早い時期に現教科言語が一定レベルに到達することが必要です。従って、初期段階における日本語支援の充実が特に重要だと考えます。その上で、教科指導のできる専門員が適宜加わる連携体制こそが必要ではないでしょうか。

いずれにせよ、教材やカリキュラムを活用させるのは支援者、支援者を活動させるのは、子どもや保護者、支援仲間、学校・行政との「信頼関係」や「連携」であり、尚且つ、ボランティアの柔軟性はすべてに発揮できると言えるかと思えます。

わたしの国

セルビアの民族文化
スラヴァについて

アレクサンドラ・コヴァッチ

セルビア共和国大使館 文化担当官

セルビア共和国は旧ユーゴスラヴィア6共和国の一つで、中世の始めにビザンチンの国境に誕生した多民族国家です。ビザンチンの影響によってキリスト教を宗教とし、ローマ法を国家基本とし、ギリシャ・ヨーロッパ文化を信念としています。地理的優位性もあって常に東西の文化が交わり、影響を受ける場所にあります。

セルビア文化の重要な特色を表すものに、スラヴァと呼ばれるセルビア人独特の習慣があります。1年に1日、祖先がキリスト教徒となった日の守護聖人の誕生日、命日、または埋葬の日とその聖人を祝い、また生きている者の健康と繁栄のために行われます。今日行われているスラヴァを作り上げたのは中世セルビア正教会初の大司教、聖サヴァとその弟子たちで、セルビア人は確固たる信仰心の証として13世紀から途切れることなく、それぞれの家の家長の洗礼名と縁の「聖人の祝日」には、洗礼名・祝いを家族の宗教行事としてきました。

現在では、父から息子へと伝承される家族のスラヴァを始めとする多くの種類があります。教会のスラヴァはその教会の聖人を祝い、村や町のスラヴァでは個々の村や町が守護聖人として選んだ聖人、もしくは過去にその場所を天災や病気から救ってくれた聖人に感謝をし、厄除けの意味も込めて祝います。その日は農地や大通りを行列で進み、神と聖人にその場所と全ての信者の幸福を祈願します。学校では1827年から毎年1月27日に学校のスラヴァとして、学校の守護聖人、聖サヴァを祝います。その日はセルビア共和国の祝日で、全ての小中高校で様々な文化行事が行われます。他に企業団体や組合などにも自分たちのスラヴァがあり、守護聖人がいます。

スラヴァを祝う家は、友人や親戚だけでなく、宿を探す旅人や困っている人全てに開かれています。たとえ洗礼を受けていなかったり、他宗教でも、見知らぬ人であっても歓迎されます。客は招待された家に入る際、入り口で迎える家長に対し「神のご

加護を。スラヴァおめでとう。」と祝福します。一度でもスラヴァなどの家族行事に参加したことのある人は、セルビア人が信じられないくらい温かいと言うことをご存知でしょう。スラヴァの前日に神父が家にやってきて、女主人を水で清めます。当日にはその儀式の一環として、事前に用意した小麦で作った特別なパン「スラヴァ・ケーキ」と、玄関先で振舞われる穀物で作った「コリヴォ」という料理を清めます。このお清めは教会かその家で行われ、手順通りケーキを切り、穀物が捧げられます。スラヴァ・ケーキはキリスト復活の象徴で形は丸く、健康の象徴である鳥、繁栄の象徴である葡萄、美の象徴である花など様々な模様が描かれ、中央には最も重要な十字架の模様とイエス・キリストの勝利を意味する「IS HS NI KA」の文字が書かれます。

その他重要なものとして、純粋な口ウで作られた特別な口ウソクが光の象徴としてスラヴァの間灯され、赤ワイン、お香と火壺が置かれます。必ず家の目立つ場所に聖人の絵、イコンを飾ります。スラヴァは、時には4日間も祝われ、様々な美味しいセルビアの伝統料理が準備されます。スラヴァは宗教的行事として始まり、歌と、円になって手をつなぎ速度を変えつつステップを踏む「コロ」という踊りで締め括られます。お客様は美味しい料理と音楽とおしゃべりで素晴らしいひと時を過ごします。



地域に密着して

江戸川平井にほんごサークル

代表 岩佐 幹彦（江戸川区）

「あなたのサークルはどちらですか」と尋ねられ、「江戸川の平井です」と答えても「江戸川平井...? ...どこ...」という反応の知名度ですが、私たちのサークルは江戸川区平井です。JR総武線各駅停車が千葉に向かって錦糸町・亀戸と過ぎると次が平井です。JR平井駅の手前の小さな川（旧中川）と荒川に挟まれた三角州の一角が江戸川区平井です。ここ平井は下町の住宅街ということで、他に比して暮らしやすい土地柄なのでしょうか、居住する外国人は多く、駅へと向かうある通り道は



道端の人たちから「国際通り」とも称されています。

必要とされていることに感謝をしながら

江戸川区内にはいくつかの日本語教室がありますが、平井地区にはなく、平井在住のボランティア経験者が知人

に呼びかけ、昨年4月にオープンしました。教室に参加をする学習者は、夜間のサークルにもかかわらず、子ども連れの女性学習者や、外国人同士のカップル等で毎回ほのぼのとした空気が漂っています。

しかし、スタートからまったくの手作りのため、サークルの存在を知っていたくにも時間がかかります。呼びかけチラシを公共施設や店舗等に置かせて頂きながら地域に浸透するように努めています。

そのお蔭もあってか、徐々に学習者・スタッフも増え、一周年となる春の「お花見」には、多くの仲間を誘い合って盛大に行なおうと計画をたてているところです。

会員団体紹介

Nice to Meet You

当教室はKICの活動の一環として週3回開設されています。清瀬市内に在住・通勤する外国人のために、少しでも日常生活を快適に過ごしていけるよう日本語の学習、情報の提供等、交流を進めるためのボランティア組織です。

平成6年に市民センターの一室から火曜クラスがスタートしました。その後平成8年から生涯学習センター（アムュー）に移り、主に働く学習者のための金曜クラス、さらに平成10年から木曜クラスが開設されました。各クラス共学習者は20人前後ですが、金曜日はその特徴から人数の変動が多くなっています。

nice to meet you

市内外国人との親善と交流を目指して

清瀬国際交流会 KIC 日本語教室

代表 加藤カツエ（清瀬市）

火曜日・木曜日は（10:00～12:00）、金曜日は（19:00～21:00）となっています。学習形式は一对一で学習内容や教材等は

二人で相談して決めています。期間は4月から3月までの1年間で4期に分かれています。第1期〔4月～6月〕 第2期〔7月～9月〕 第3期〔10月～12月〕 第4期〔1月～3月〕です。途中からの学習、次の年度の延長も可能です。

学習者とボランティアの交流は、各期末ごとにお楽しみ会（パーティ）があり、日本の習慣、行事等紹介しながら楽しく生きた会話の学習が出来ます。

ボランティア同士の意見交換、連絡等は月に1回のクラスミーティングで行



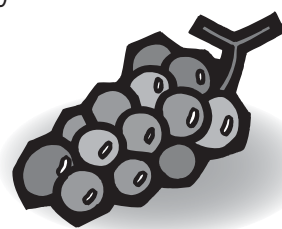
います。また3クラスありますので月1回の世話人会を設けて連絡、学習者の移動など調整を図ります。年間行事としては、4月のスピーチ発表会、5月から7月にかけて全11回のボランティア養成講座（清瀬市の社会教育課と共催）、11月のステップアップ学習会があります。

現在（平成18年8月31日）18ヶ国の出身者が学習していますが、学習だけでなく〔KIC〕のパーティや行事にも一緒に参加し、交流を深めながらこの教室を運営していきたいと思っています。

学習者の声

名作を読んで

「やっつゝ日本語」(江東区)



中級クラスを担当した時『新日本語の中級』を主教材とし 中級日本語学習者・帰国子女のための読解教材 「どんどん読めるいろいろな話」(武蔵野書院)を副教材として使いました。本の中の『一房のぶどう』と『羅生門』を読みおえたあとで授業の一環として書いてもらったものです。

「羅生門」
(巖谷小波)を読んで

元 美花 (韓国)
わん みふあ

はじめて『羅生門』というだめいを聞いた時、前住んでたところのとなりのよく主人と食べにいった焼肉屋さんをおもいだしました。

一番印象的なことは「わたなべのつな」という人が、鬼の腕をもって自分の部屋に置いといたということで信じられませんでした。

鬼という名前を聞いただけでもきもちが悪いのに、部屋に置いといたのは私としてはありえないことでした。やっぱり偉い人は別だなと思いました。

「一房のぶどう」
(有島武郎)を読んで

中村エストレリタ (フィリピン)

子どもがわるいことをしたときにすぐおこらないで、しずかなへやで二人でこころをひらいてはなしをしてかんがえさせるのはよいとおもいました。こどもはわるいことをなかなかみとめないけれど、すなおにじぶんでわかったとみとめました。

そんなことをけいけんしたこどもは、ほかのこどもにわるいことをおしえることができるとおもいます。

ボランティアの声

地球人として、日本人として

早福 泰子

社会福祉法人さぼと21 (品川区)

土曜日の学習支援室で日本語指導のお手伝いを始めて2年。現在、スーダンとミャンマーの男性(40代、50代)の個人クラスを担当しています。スーダンからの男性は内戦でのつらい経験を抱え、20年以上ものキャリアをもつ空手を続けながら、また、ミャンマーからの男性は、軍事政権を倒し民主政権をたてるために仲間と活動しながら、謙虚に一生懸命学んでいます。お二人とも信仰心の厚い誠実な方で、ご自分の国や文化に誇りを持っており、その生きる姿勢にこちらが叱咤激励されることがしばしばです。

わたしにとって、日本語を教えるいちばんの喜びは、生徒さんとお互いの国の文化の違い



いを超えて、人間として、地球人として共通の思いをもっているということを実感できることです。こちらの指導力不足や生徒さんの日本語力から、コミュニケーションが十分にはかれないのですが、心がつながったと思えるときはほんとうにうれしいです。世界がまた少し近くなったと感じます。

また、外国の方とおつきあいは日本人としての自覚をもつ貴重な機会でもあります。「わたしは日本人としての誇りを持っているだろうか。これが好きだと自信を持って紹介できるものがあるだろうか」といつも自問させられます。日本語、神道とミックスした仏教、伝統的な美術や芸術、食文化、みんな好きだけれど、自信を持って紹介するとなると.....先日も生徒さんと趣味の言い方の勉強で音楽の話になり、「わたしはベートーベンやジャズが好き」と言ったら「どうして日本の伝統的な音楽じゃないの」と問われて、はっとさせられました。

これから土曜の朝の「おはようございます」の笑顔に会いたくて、目黒へでかけます。



ニュースレターの記事をお待ちしています

ニュースレターは3ヶ月毎に発行しています。団体・個人にかかわらず、日本語学習支援・日本語ボランティア活動に関する意見・紹介・情報などの記事を是非お寄せ下さい。掲載記事についてのご意見・希望も歓迎します。
TNVN NL編集担当宛にお送り下さい。

TNVNスタッフ募集!!

TNVNの事務局スタッフ・ニュースレター編集員となってTNVNスタッフと一緒にボランティアでご協力いただけませんか。TNVN事務局までご一報をお待ちしています。

TNVNへの入会をお待ちしています

詳細はTNVN事務局まで「活動・入会案内」を郵便でご請求下さい。(送料90円切手同封)

国際化市民フォーラム in Tokyo

2月24日(土) JICA地球ひろば(渋谷区広尾)で開催されました。毎年恒例となり、東京都国際交流委員会と国際交流・協力TOKYO連絡会(TNVNもメンバー)とが協働・連携して実施する意義あるフォーラムです。国際交流・国際協力の分野から8つの分科会が設けられ、「外国から来た子どもたちと教育～第1部・第2部～」
「みんなで話そう! 多文化子育て」
「異文化摩擦と異文化理解」

「日本の難民受入れの現状を知ろう」
「外国人と住まい」
「外国人の医療を考える」
「国際協力の道を目指す若い世代のために」等のテーマで報告・討論、意見交換等が行われ、中でも「外国から来た子どもたちと教育」と「異文化摩擦と異文化理解」への関心が大きく会場は満席の状況でした。その他の分科会で取り上げたテーマも東京が抱える大きな問題であり、今回のフォーラムで出された議論は今後の成果に向けた大きな力となる事が期待されています。

Column

❖「在住外国人に対する情報提供」と題して

全国市町村国際文化研修所(滋賀・唐崎)で開催された「多文化共生社会対応コース」の講座で「在住外国人に対する情報提供」について話をすることがありました。事例を紹介し、その中で言葉の壁を感じている外国人にどの様に必要な情報を伝えるか、日本語学習支援の活動を通して感じている事を聞いて貰いました。
外国人への情報提供 特に行政情報や生活情報を当該者にどの様に伝えるか。情報の記述は多言語化やルビ付き日本語であればそれで良いのでしょうか。どうも難しい言葉・単語にルビが平気で振られています。

分かりやすい日本語で書けないでしょうか。記述内容・枚数が多すぎませんか、もっと簡単明解に、もっと少なく適切に。文は読む人の身になって作って下さい。
多くの行政・自治体で同じような構成・内容で生活ガイド、災害時対応など多くの情報が作成されています。しかしせっかく作られた情報が十分周知されず眠ってはいませんか。作成された情報を然るべき機関・団体で収集管理し、必要とされる場所・人達への周知を工夫して欲しい。是非必要です。(人・時間・金の節約です)
(梶村 勝利)

❖別れは寂しいもの

中国の企業から日本の関連会社へ来ていた学習者が、1年半の勤務を終え帰国しました。いつも穏やかで、雨の日も風の日も来ていた人。誰とでも気軽に話し、いろいろな行事やパーティーにも出席して楽しんでいました。西

武園の花火大会も大相撲観戦も・・・思い出すときりがありません。みんなにびっしり書いてもらった2枚の色紙を大事そうに抱えて、最後を惜しみながらのお別れ。やはり、別れは寂しいものです。今はただ、お国での活躍を祈るばかりです。
(よ)

TNVN東京日本語ボランティアネットワークはボランティア日本語学習支援活動を行っている団体のネットワークです。TNVNの会員はそれぞれ地域での日本語学習支援活動を通し、言葉のため日常生活に不自由を感じている外国人などを、隣人として支援しています。TNVNは会員への情報提供・会員相互の情報交換、および外部との情報受発信を行い、活動の活性化を図ります。

東京日本語ボランティア・ネットワーク事務局の活動

日時: 毎週金曜日

第1、第3、第5 金曜日 / 午後2時～4時
第2、第4 金曜日 / 午後2時～6時

場所

東京ボランティア・市民活動センター
JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線 - 出口B2b)飯田橋駅下車
セントラルプラザビル 10F ロビー

日本語ボランティア相談窓口

日本語ボランティアの活動についてのご相談・ご質問にベテランスタッフが応えています。電話でご確認の上、気軽にお越し下さい。また、メールでのお問い合わせにもお応えています。ご意見もお待ちしています。

〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1
東京ボランティア・市民活動センター
メールボックス No.4

TEL: 03-3235-1171

(呼出: 金曜日活動時間帯のみ)

FAX: 03-3235-0050

E-mail: webadmin@tnvn.jp

URL: http://www.tnvn.jp/

郵便局払込

口座番号: 00100-1-719259

加入者名: 東京日本語ボランティア・ネットワーク

会員数(2007年2月9日現在)

正会員: 79団体 協力会員: 47名

賛助会員: 4団体

編集/岩佐 幹彦、大木 冬冬、岡田 美奈子、小川 伶子、梶村 勝利、床呂 英一、西岡 暉純、林川 玲子、福井 芳野
レイアウト/鶴田 環恵